

聖書:ルカの福音書9章37~45節

説教:不信仰な曲がった時代

はじめに

新しい年の初めに人は様々なことを願います。新型コロナウイルスの感染がおさまるとか、受験をひかえている方なら、希望の学校に合格しますように、困難な病気の中におられる方なら、どうか癒やされますようにと祈るでしょう。暗闇の中で道に迷ってしまえば、わらにもすがる思いで光を探し求める。それが人間です。

今朝開いている箇所が登場する父親もそんなひとりだったのでしょ。汚れた霊につかれて苦しむ息子が父親にとってどんなにか大切な存在であるか、それは38節で、「私のひとり息子です」とわざわざ念を押しているところからもうかがえます。汚れた霊はこの子どもに取りつき、おそらくてんかんに似た症状を起こさせる。私の家で以前飼っていた猫は、てんかんの発作を時々起こすことがありました。ほとんど前触れもなく突然激しい痙攣を起こし、目がうつろになり、よだれを流しながらからだが硬直するのです。初めて見たときは死んでしまうのかと思いました。猫がそばで苦しんでいるのに、飼い主は何もできない。これはとてつらいことでした。

1 父親の願い

1) 弟子たちがやってみたが

マルコの福音書によれば、息子がこんなふうに苦しむようになったのは幼いときからだと言っています。これまでいろいろな医者やまじない師にかかったけれど、だれも癒やすことができない。そんなときイエスのうわさを耳にし、霊を追いだしてくださるようお願いしにはるばる遠くからやってきたのでしょ。ところが、あいにくイエスは三人の弟子を連れて山に行って留守だという。困ったなと思ったら、留守を守っていた弟子たちが、「大丈夫。私たちが霊を追いだしてみせるから安心しなさい」と言ってくれた。

2) 不信仰になる弟子たち

ところが弟子たちは汚れた霊を追い出すことができない。最初から追い出す力がなかったというわけではありません。9章1節にこうあるのです。「イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授けになつ

た。」なのになぜかこの時、できなくなってしまう。どうしてか。

前回は触れたことですが、このときの弟子たちの霊的な状態が関わっています。46節にこうあります。「さて、弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。」彼らがイエスの弟子になりたての最初の頃は、自分は汚れた罪人であるとの自覚があつて謙遜だったのに、悪霊を制する権威をいただいた途端に自分は偉い者であるとか勘違いをし始め、それで信仰をなくしてしまい、悪霊を追い出せなくなってしまうのです。

これは他人ごとではありません。私自身も同じです。神学校を出た直後は、教会の方から「先生」と呼ばれるとなにか身の丈に合わないような感じがして恥ずかしかった。ところが今は、「先生」と呼ばれてもなんと思わない。どこかで当たり前にさえ思っている。とんでもないことです。こういう牧師は危ない。皆さん、気をつけてください。

2 イエスとモーセ

1) 三つの疑問

弟子たちはそんなことには気がつかず、頭をひねっていたとき、ちょうどイエスが山から降りてきます。父親の願いを聞かれたイエスは41節でこう語る。「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいて、あなたがたに我慢しなければならぬのか。あなたの子をここに連れて来なさい。」

三つのことが気になります。一つ目。「ああ、不信仰な曲がった時代だ」とイエスは嘆いておられます。なにをもって不信仰な曲がった時代だと語るのか。それが一つ目。

二つ目。「いつまでわたしはあなたがたと一緒にいて、あなたがたに我慢しなければならぬのか。」イエスは、いつも優しい方だと思っていたのに、本心では実は我慢していた。もしそう言う意味ならがっかりです。もちろんそうではないと思いたいのですが、ではどうしてこんな言い方をするのか。

三つ目。イエスが悪霊を追い出して人々が大騒ぎをしていると、弟子たちにこのように言うのです。44節。「あなたがたは、これらのことばを自分の耳に入れておきなさい。人の子は、人々の手に渡されようとしています。」

大勢の人々が見ている前でイエスが悪霊を追い出したのですから、盛大な拍手喝采が沸き起こり、弟子たちも気分が大いに盛り上がったことでしょう。そんなとき、イエスはまるで水を差すようにして、不吉なことばを語ります。ここだけではありません。イエスが山に登る直前もそうでした。9章2節で、イエスがこれから受けようとされる十字架の苦しみと復活について初めて弟子たちに明らかにされてた。ところが、弟子たちは何度聞いても理解できない。わからないのなら質問すればよさそうなのに、恐ろしくて質問できずに沈黙してしまう。なぜイエスは、このタイミングでご自分の苦しみのことを語るのでしょうか。

2) モーセ 金の子牛事件

一つ一つ見るとわからないことだらけですが、必ずここには意味があるはず。どうやって考えたらよいか。

その糸口として、前回触れたことですが、イエスが山に登られたときに、モーセとエリヤが現れたことを思い出してみます。二人はイエスとともにエルサレムで遂げようとしている最期について話していました。二人は見えなくなり、イエスも山から降りてきて、もうあのことは終わったと思ったかもしれませんが、実は終わっていない。ずっとつながっている。

モーセの時代にさかのぼります。モーセが最初にシナイ山に登り、二枚の石の板を手にしてシナイ山から降りてきたとき、何が起きていたか。山のふもとではイスラエルの民が金の子牛を造ってそれを拝んでお祭り騒ぎをしていた。モーセはその光景を見て怒りに燃え上がり、二枚の石の板を投げ捨てて砕いてしまう。けれども最後には、神とイスラエルの民の間に立ってモーセは祈るのです。出エジプト記32章32節。「もしあなたが彼らの罪を赦して下さるなら。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去って下さい。」神はモーセのこの祈りを聞かれて思い直し、もう一度モーセをシナイ山に登らせ、そこで二枚の石の板に十戒を記して下さった。そういうことがありました。

今日の箇所を比べてください。モーセが山から降りてきたら、民たちは不信仰になって金の子牛を拝んでいた。イエスが山から降りてきたら、弟子たちが悪霊を追い出せなくなるほどに不信仰になっていた。流れがそっくりではないですか。この箇所だけでなく、福音書全体を調べていくと、イエスは出エジプトの出来事をなぞるように歩ん

でおられるのではないかと思うことがたくさんある。

3 十字架に向かうイエス

1) ずっと不信仰で曲がっている人間

そうするとききほど挙げた三つの疑問を考える視界が開けてきます。まず一つ目のこと。「不信仰な曲がった時代だ」とはどういう意味か。イエスのときが特別に不信仰で曲がった時代だということではありません。モーセの時からすでにイスラエルは不信仰だったのです。そのことは今の時代も変わらない。イエスにとっては、先刻ご承知のことです。ということは、これは驚いて言っているのではない。「イスラエルの民のうなじが堅かったように、あなたがたも不信仰ですね」と確認している。そのような意味でしょう。

2) 十字架に向かう決心

二つ目。「いつまであなたがたに我慢しなければならぬのか。」そもそも「あなたがた」とはだれのことか。群衆なのか、弟子たちなのか、それともどちらも指しているのか。いろいろ議論はありますが別にどれと決める必要はありません。先ほども言ったように、弟子たちは最初信仰があったのです。ところが身の丈に合わないようなすばらしい権威と力を手にしてしまったために、だれが一番偉いかということばかり考えるようになって信仰を失っていく。ですから「あなたがた」は弟子のこと。

一方で別の見方もできます。汚れた霊につかれてもがき苦しむひとり息子とその父親をそばで見ているが、だれも助けることができない。それはまさに罪の世界なのです、そのような人たちを「あなたがた」、つまり私たち全員を指しているとも考えることもできる。

そうすると新たな疑問がわき起こります。そもそもイエスは、不信仰になって罪に苦しんでいる私たちを救うために来られたのではないか。それなのに、堪忍袋の緒が切れてしまって、「いつまであなたがたに我慢しなければならぬのか」と言うのでしょうか。

そうではありません。イエスがどのような方であるかをよく知っていただきたい。この方は、「あなたがたのためにわたしは十字架について上げる」というような、恩きせまがしい言い方は絶対にしない。むしろ隠そうとさえいたします。

ですからこれは「引っかけ問題」だと思ったほうがよい。そもそも我慢したくないからと言って、

この方はどこかに逃げることができるのか。この方が行くところは十字架しかないのです。他に行くべき道はない。

そうすると「いつまであなたがたと一緒にいて」は、最初の印象とはまったく違う意味になる。あのモーセが罪を犯したイスラエルのために、自分のいのちを捨ててとりなしの祈りをしたように、この方は、罪に苦しむ私たちのために、いのちを捨てて神にとりなすのだ。あらためて十字架に向かう決心をしていることばであったのです。

3) 人々の手に渡される

こうして見てくると、イエスがこのタイミングで弟子たちにご自分の苦しみのことを語るのは、意外なことでも何でもなし。むしろ自然であった。ところが弟子たちは、そんなことを理解できません。イエスが悪霊を追い出したのを見て、あらためて一番偉くなろうと決心した。それが幸いであると思ひ込んだ。ところが幸いはどこにあるのか。私たちの本当の幸いは、この十字架にしかないのです。

父親はひとり息子が苦しむのをなんとか助けたいと願ってイエスのもとにやって来ました。父なる神はどうだったのでしょうか。ひとり子が十字架で苦しむとき、この父親のように苦しんだはずですが、それでも私たちを罪から救い、本当の幸いを与えたいと願って、ひとり子である方は十字架に向かわれました。

この一年も、この方とともに歩んで参ります。